

大規模英語コーパスを利用した「強意形容詞」の研究

西部真由美

目次

- 1 はじめに
 - 1.1 強意形容詞
 - 1.2 辞書に記述された強意形容詞の同義・類義関係
 - 1.3 共起制限
- 2 分析方法
 - 2.1 コーパスと分析手順
- 3 結果と考察
 - 3.1 強意形容詞の出現頻度
 - 3.2 共起する名詞
 - 3.3 名詞から見た共起する強意形容詞
 - 3.4 共起する形容詞
- 4 おわりに

に典型的な強意形容詞である *absolute*, *complete*, *perfect*, *pure*, *real*, *sheer*, *total*, *utter* に絞って分析を行うことにする。この8つの語彙は和英辞典や英英辞典で「強意」や「強調」の用法として特別に項を設けて記述されており、「全くの」という意味が与えられており、次の様な表現で使用される。(イタリックが強意形容詞)

- (1) *absolute* disgrace (全くの不名誉), a *complete* stranger (赤の他人), a *perfect* ass (全くの馬鹿野郎), *pure* fabrication (全くの作り事), *real* tragedy (全くの悲劇), *sheer* nonsense (全く馬鹿げていること), a *total* disaster (全くの大失敗), an *utter* amazement (全くの驚き)

Levi (1976) では、次の(2)の中の強意形容詞は全て *real* に置き換えることができ、意味の変化もないと述べられている。

- (2) an *absolute* idiot, *pure* speculation, a *sheer* delight, a *complete* stranger an *utter* fool, a *total* disaster, a *perfect* idiot
(Levi, 1976: 225)
(部分引用, イタリックは筆者)

1 はじめに

1.1 強意形容詞

「強意形容詞」とは、名詞句(名詞あるいは修飾語を伴う名詞)の前に置かれて語の意味を強調する形容詞のことで、先行研究では“Emphasizing Adjectives” (Sinclair, 1990: 69), “Emphasizers” (Quirk, et al., 1985: 429), 「強意の形容詞」(Intensifying Adjective) (安井ほか, 1976: 74) などと称されている。

しかし実際のところ、語を「強調する」という概念が必ずしも厳密に定義されていないため、研究者によって「強意形容詞」とみなす語彙に若干の相違がある¹⁾。そこで本研究では特

これらの強意形容詞の文法的な特徴として、限定用法で使用され、非段階的 (non-gradable) で比較変化をせず *very* によって修飾されることはなく、不定冠詞と共起するのが通例であるという指摘がなされている (Quirk, et al., 1985: 42; 安井ほか, 1976: 78-9)。さらに、限定用法で現れるこれらの強意形容詞は、通常は叙述的に書き換えると意味の通らない文になるという特徴がある。例えば (3a) を (3b) の様に書き換えることはできない。

(3a) *total nonsense*.

(まったく馬鹿げていること)

(3b) **The nonsense is total*.

ここで留意しておくが、個々の語彙が強調というよりはむしろ本来の語義で使用されている用例: *absolute* (絶対的な, 疑う余地のない), *complete* (全部の, 完成した), *perfect* (完全無欠な, 申し分ない), *pure* (純粋な), *real* (実物の, 実質的な), *total* (全体の, 総計の) など、あるいは他の意味で使用される用例: *sheer* (切り立った, 薄い) は、本研究では分析の対象にしていない。特に、極端に高い程度を表す *absolute*, *complete*, *perfect*, *total* は強調用法との区別が紛らわしいが、(4) に挙げた表現は対象外としている²⁾。

(4) *absolute truth* (絶対的真実), *absolute commitment* (完全委任), *absolute silence* (完全静寂)³⁾, *complete victory* (完全勝利), *complete works* (全集), *a perfect crime* (完全犯罪), *a perfect host* (申し分ない主人役), *a total ban* (全面的禁止), *total war* (総力戦) など

例えば対象外の例である次の (5a) では、

total が「全面的な」という本来の語義で使用されており、破壊が全体に及ぶのを示すことに重点が置かれていると考えられる。この場合には (5b) の通りの叙述的な書き換えが可能になる。

(5a) *total destruction*. (徹底的破壊)

(5b) *The destruction is total*.

(Quirk, et al., 1985: 429-30)

本研究が対象にする強調の用例であるか否か紛らわしい場合には、上述の特徴を考慮に入れるとともに、形容詞に *-ly* を付加した場合に強意の副修飾語 (submodifiers) として解釈できれば対象に含めることとし、代表的な英英辞典や和英辞典および小西 (1989) での解説や例を参照しながら用例の選別を行った。

1.2 辞書に記述された強意形容詞の同義・類義関係

前項で挙げた強意形容詞には共通して「全くの」という意味があるものの、個々の語彙が全く同じ条件で使用されるのではなく、他の強意形容詞と置き換えが可能な場合と、そうではない場合とが認められる。

そこでまず、先に挙げた8つの強意形容詞の同義・類義関係について辞書で調査を行った。辞書の記述の中で「強調の働きをする」と明記されている項目を抜き出し、その場合の語の定義や類義語を確認してまとめたものが表1である。

参照した辞書は代表的な2冊の学習者用英英辞典 *Longman Dictionary of Contemporary English*, 3rd ed.(2000), *Oxford Advanced Learner's Dictionary*, 6th ed.(2000) と類義語辞典 *The Concise Oxford Thesaurus*, 2nd ed.(2002) および『ジーニアス英和大辞典』(2001) の計4冊である。

表1 強意形容詞の同義・類義関係

記述部 見出し	absolute	complete	perfect	pure	real	sheer	total	utter
<i>absolute</i>		◎	△	○	△	△	○	△
<i>complete</i>	△		△		△	△	○	△
<i>perfect</i>	△	◎				△	○	△
<i>pure</i>	△	◎	△			△	○	△
<i>real</i>	△	△	△				△	△
<i>sheer</i>	△	○		◎			△	△
<i>total</i>	△	◎	△			△		△
<i>utter</i>	○	◎	△	△	△	△	△	

◎類義語辞典に記載あり、かつ他の2冊以上の辞書で語の定義の中に同義語として記載あり。
 ○類義語辞典に記載あり、かつ他の1冊の辞書で語の定義の中に同義語として記載あり。
 △類義語辞典のみに記載あり。

表1から読み取れる特徴として次の3点が挙げられる。最も顕著な点は、*complete*が6語について同義語、残りの1語についても類義語として扱われている点で、*complete*は強意形容詞の中核的な意味を含むと考えられる。同様に全ての語において*complete*に続いて*total*、*absolute*、*utter*の順で同義あるいは類義関係にあることが判った。以上から、これら4語が最も典型的な「強意形容詞」であると推測できる。そしてこれら4語（と*perfect*）は本質的に「極端に高い程度」を表す形容詞であることにも留意しておきたい。

対照的に、*real*は同義語がなく*real*を類義語として挙げている語も極めて少ない。おそらく*real*は比較的限られた種類の名詞句と共起すると推測される。

そして*sheer*の同義語としては、*complete*よりも上位で*pure*が挙げられている点は他の語には認められない特徴である。これは*sheer*と*pure*は「混ざりものない、純粋な」という共通した本来の語義があるためだと考えられ、こ

の2語は同じ様な条件で使用され、他の強意形容詞とは異なった名詞と共起する可能性があるとして予測される。

いま第2点と第3点で挙げた語彙*real*、*pure*、*sheer*は第1点で挙げた他の5つの語彙と異なり、本質的に「極端に高い程度」を表す形容詞ではない。このことから*real*、*pure*、*sheer*と他の5つの語彙では共起語に差異が見られるのではないかと推測できる。

1.3 共起制限

前項では辞書の記述から「強意形容詞」について判断できることを述べたが、辞書にある定義や類義語あるいは例文だけで個々の語彙の細かい使い分けや共起可能な語を把握するには限界がある。例えば(6a)の様な名詞との共起は可能であるが、(6b)の様な名詞とは共起しうにない。

- (4a) a *complete* stranger, *sheer* nonsense,
an *utter* amazement
- (4b) ?? a *complete* friend, *sheer* sense, an
utter assignment

強意形容詞の名詞との共起制限について、安井ほか（1976）は次のように述べている。

強意の形容詞と名詞との間の共起制限は、興味深い問題ではあるけれども、かなり複雑で不明の点も多い。（中略）強意の形容詞と名詞の共起制限は、個々の語彙項目により異なるので、適正な一般化は、かなり、むずかしいけれども、一般論として、強意の形容詞は段階的名詞および内在的に機能を表す名詞と共起するとよいてよいと思われる。（下線は筆者）（安井ほか, 1976: 80-1）

引用部の「段階的名詞」とは fool, genius, idiot などでありその名詞が示す特質の程度に段階があるもので、その逆の非段階的名詞として girl, lad, person などが挙げられている。そして「内在的に機能を表す名詞」とは職業名などで teacher, doctor, farmer が例として挙げられている。

この指摘は興味深いが、安井ほか（1976: 80-1）で言う強意形容詞は極めて広範囲に及んでおり、本研究では対象外の用例（例：a *real* (=true) friend, a *perfect* (=ideal) housewife）も対象としているため、本研究で扱う強意形容詞が「内在的に機能を表す名詞」と共起するかは

疑わしい。また、これは極めて少数の用例に基づいて論じられた見解であり、量的に充実した用例に基づいて検証する必要がある。そこで本研究では、大規模英語コーパスを利用して強意形容詞の共起語を分析し、先に述べた推測の検証を行うことを目的とする。

2 分析方法

2.1 コーパスと分析手順

本研究ではBritish National Corpus World Edition (2000) (以降BNC) の全ての資料を利用した。BNCの検索用ツールとしてSARA version 0.98を使用した。上記8つの形容詞を含む例を検索し、話し言葉では全ての検索例を抽出した。書き言葉では頻度の低い*sheer*と*utter*については全件を抽出し、それ以外の語については最大で2000件までを無作為に抽出した。なお、コーパスに於ける個々の語彙の総出現数は表2の通りである。

この検索例をテキストファイルに変換しEXCELに取り込んだのち、筆者が全検索例に目を通して強意用法で使われている用例を抜き出し、共起する「名詞」と「形容詞+名詞」について分析を行った。なお名詞については単複の区別はしていない。

3 結果と考察

3.1 強意形容詞の出現頻度

強意形容詞の用例の総出現頻度を語彙別、レジスター別にまとめたものが表3である。

表2 コーパスにおける語彙の総出現数(延べ語数)

	absolute	complete	perfect	total	utter	pure	real	sheer	計
s	313	430	299	702	25	146	1346	63	3324
w	*3085	*8804	*5145	*12693	447	*3158	*20840	1958	56130

注：s=spoken texts, w=written texts. *印は2000件に限定して分析した語彙を示す。

表3 コーパス中の強意形容詞の出現頻度

		absolute	complete	perfect	total	utter	pure	real	sheer	計
延べ語数	s	92	89	5	63	17	23	218	26	533
	w	444 (288)	801 (182)	214 (88)	819 (129)	221	480 (304)	1990 (191)	611	5580 (2009)
	計	536 (380)	890 (271)	219 (88)	882 (192)	238	503 (327)	2208 (409)	637	6113 (2542)
百万語あたり語数	s	9	8	0	6	2	2	21	2	50
	w	5	9	2	9	2	5	22	7	62
	計	5	9	2	9	2	5	22	6	61
強意用法の割合	s	29.4%	20.7%	1.7%	9.0%	68.0%	15.8%	16.2%	41.3%	16.0%
	w	14.4%	9.1%	4.2%	6.5%	49.4%	15.2%	9.6%	31.2%	13.9%
	計	15.8%	9.6%	4.0%	6.6%	50.4%	15.2%	10.0%	31.5%	10.3%

注：「延べ語数 (token)」は、Spokenについてはコーパス中の全件数。Writtenは *utter, sheer*についてはコーパス中の全件数、それ以外の語については2000件中の強調用法の数(括弧内)の割合に基づき概算した値。「割合」は語彙のコーパス中の総出現数に対する強調の用例数が占める割合。

全体的な特徴として言えることは、強意用法の *real* の出現回数が著しく多いことであるが、この語彙自体の出現頻度が高く (表2参照) 単純にこれに比例した結果である。特に重要な点は、語彙の総出現数に占める強意用法の割合で、2語 (*perfect, pure*) を除いた6語が書き言葉より話し言葉においてより大きな割合を占めていることである。強意用法の百万語あたりの出現頻度ではこの2つのレジスターでの差異は目立たないことから、これらの語彙は書き言葉では強意用法以外の意味で使用される頻度が話し言葉よりも高いと考えられる。個々の語について強意用法の割合を見てみると、*utter* (50.4%), *sheer* (31.5%) が大きいのに対して、*perfect* (4.0%), *total* (6.6%) は小さくなっている。これは *perfect, total* は多義的で別の意味で使われることの方が多いが *utter, sheer* は「全くの」という意味が基本的な語義であることを反映した結果だと言えよう。

3.2 共起する名詞

強意形容詞全体としては、高頻度共起名詞は *rubbish* (40), *chance, nonsense* (39), *waste* (37), *joy* (30), *pleasure, stranger* (28), *delight, hell, luck* (26), *coincidence* (23) (括弧内は出現回数) の順となり、特に *rubbish, nonsense* はより多様な強意形容詞に高い頻度で共起していた。共起する名詞は抽象名詞で、その名詞が示す性質に程度や段階がある名詞 (degree nouns) が全体の殆どを占めた。

高頻度共起名詞をレジスター別で見ると、話し言葉では *waste* (20), *rubbish* (19), *nonsense* (14), *trouble* (13), *disaster, disgrace, mess* (10) の順になっており、嫌悪感を吐き出す様な表現で占められていた。書き言葉では *chance* (34), *joy* (29), *pleasure* (27), *luck* (26), *delight* (25) の順で多く共起し、話し言葉とは反対に喜びや幸運を示す名詞が上位を占めた。しかし以降の順位からは話し言葉と同じ様に *nonsense, hell* (25) などの否定的評価を表す名詞も共起していた。

表4 強意形容詞と共起する名詞

	延べ語数	異なり語数	割合	頻出共起名詞 ()は出現数
absolute	380	200	.526	rubbish(24), nonsense(17), disgrace(13), disaster(9), beginner(8), fool, poverty(7), hell(6)
complete	271	169	.624	waste(14), stranger(13), contrast(9), idiot(6), loss, mystery, opposite(5), certainty, collapse, prat, surprise(4)
perfect	88	72	.875	foil(8), boost, end, happiness(3), baby, child, cross(2)
total	192	128	.667	stranger(13), waste(8), absence, mess, absorption, abstinence, chaos(4), distortion, ignorance, loss, nonsense, opposite, opposition, secrecy, shock, wanker, washout(3)
utter	238	128	.537	nonsense(15), confusion(11), rubbish(10), contempt(7), chaos, despair, disbelief(6), amazement, bastard, conviction, disgrace, helplessness, horror, stillness, surprise, waste(4)
pure	327	186	.569	chance(18), coincidence, joy, speculation(11), accident(10) fantasy, pleasure(7), delight, genius, separatism(6), waste(5), fiction, guesswork, magic, panic, sensation(4)
real	409	248	.606	trouble(15), pain(12), change(9), chance, difference, threat(8), cheese, wealth(6), difficulty(5), worry(4)
sheer	637	306	.480	luck(23), beauty, terror(17), delight, hell, joy, pleasure(16), chance(12), coincidence, determination(9), desperation, exhaustion, panic(8), bliss(7)

注：割合は「異なり語数」÷「延べ語数」。

強調形容詞と共起する名詞の延べ語数と異なり語数、タイプ・トークン割合および頻出共起名詞をまとめて示したものが表4である。

個々の強意形容詞について結果を見ていくことにする。

- ・ *absolute*：軽蔑や嫌悪の感情を伴って使われる名詞 (rubbish, nonsense, fool, etc.) と共起してその好ましくない状態が極限的であることを表わすのに使用されることが多い。
- ・ *complete*：浪費 (waste) や喪失 (loss), よそ者 (stranger), 対照 (contrast) や反対 (opposite), 馬鹿 (idiot, prat), 驚き (surprise) や謎 (mystery) などが頻出共起名詞となっていて全ての共起名詞の

間に統一した意味は見つけ難いが、段階的名詞の表す程度が著しく高い場合に用いられている。

- ・ *perfect*：辛い仕事(foil)と最も頻繁に共起し、幼さを示す語(baby, child)とも共起している。
- ・ *total*：よそ者 (stranger) と最も多く共起している。浪費 (waste) や喪失 (loss), 驚き (shock) や秘密 (secrecy), 反対 (opposite, opposition) など, completeと共起する名詞と意味的に似通ったものが多い。混乱状態を意味する名詞 (mess, chaos) も多く共起している。
- ・ *utter*：軽蔑や嫌悪の感情を持って使用される名詞 (nonsense, rubbish, bastard,

disgrace) が最も多く共起していて、この点は *absolute* と共通している。混乱状態や絶望を意味する名詞 (confusion, chaos, despair, helplessness), 驚きや恐怖を意味する名詞 (amazement, surprise, horror) も多く共起している。全体的に見ると否定的な意味合いを持つ名詞が多い。

- ・ *pure*: 上記の極端に高い程度を表す強意形容詞と全く異なり、偶発性や不確実性を表す名詞 (chance, coincidence, speculation, accident, guesswork, magic, fantasy) が頻出共起名詞の大半を占めている。他には喜びを意味する名詞 (joy, pleasure, delight) と多く共起していることも特徴的である。
- ・ *real*: 苦難の意味を持つ名詞 (trouble, pain, difficulty, worry) と多く共起しているが、他の意味の名詞とも多く共起している。比喩的な名詞 (cheese=魅力的な女の子) が頻出共起名詞に挙がっているが、比喩表現が異なり語数に占める割合は他の強意形容詞と比べてかなり大きい (17%)。特に人間を指し示す表現 (cat=気取り屋, cow=のろまな女, dog=卑劣漢, fox=魅力的な若い人, mare=意地悪女, mouse=臆病者・可愛い子, nub=醜い人, roly-poly=ずんぐりした人, turncoat=裏切り者) と、困難を表す比喩表現 (drags=障害物, ashes=悲しみ, handful=厄介な物, hedge=障害, thorn=苦しめる物) が多く見られる。
- ・ *sheer*: 偶発性を表す名詞 (luck, chance, coincidence) や、喜びを意味する名詞 (delight, joy, pleasure, bliss) と多く共起している。この点で *pure* と類似している。窮地の状態に関する名詞 (terror, hell, desperation, exhaustion, panic) とともに高い頻度で共起している。

既述の内容の要点をまとめると、*absolute* と *utter* は軽蔑や嫌悪を表す名詞と最も多く共起し、否定的な感情や状況あるいは驚きを表す名詞と共起することが多いが、*complete* と *total* は先の2語よりは幅広い種類の段階的名詞と共起する。一方で *pure* と *sheer* は偶発性や不確実性を意味する名詞あるいは喜びを意味する名詞と共起することが多く、*real* と *perfect* は先に述べた様な他とは違った特徴を持つ語彙と共起することが多いと言えよう。

3.3 名詞から見た共起する強意形容詞

前項で強意形容詞と共起する名詞の意味的特徴が示されたが、さらにこの見解の妥当性を検証するために頻出共起名詞をAからEの5種類に分類し、個々の名詞に共起する強意形容詞の分布と出現数を表5に示した。

表5のA群は不愉快で軽蔑する物や人を表す名詞であり、全ての名詞が *absolute* と最も多く共起し、*utter* とともに高い頻度で共起している。なかには *complete*, *total* と共起する名詞もあるが頻度は低く、*pure*, *real*, *sheer* と共起する名詞はさらに少ない。どの名詞も *perfect* とは共起していない。

B群は人の熟達度や熟知度を表した名詞で、*pure*, *real*, *sheer* とは全く共起していない。また *beginner* の場合は *an absolute beginner* が、*stranger* の場合は *an complete/total stranger* が典型的な表現であることが判る。これは、*beginner* は段階的と言うよりも極点を示す名詞であるのに対して *stranger* はその程度に多少の段階を認めることができるといった違いが反映されたのではないかと考えられる。

C群はA群とは反対に喜びの意味を持つ名詞や美しさを表す名詞である。全ての名詞について、*sheer* が最も高い頻度で共起しており、次に *pure* が続いている。1語を除いて *real* とともに共

表5 頻出名詞と共起する強意形容詞

		absolute	complete	perfect	total	utter	pure	real	sheer
A	nonsense	17	1		3	15			3
	rubbish	24	3		1	10	2		
	hell	6				1	3		16
	disaster	9	2		2	3		2	2
	disgrace	13				4			
	fool	7	3		1	3			
B	beginner	8	3		1				
	stranger		13	1	13	1			
C	bliss	4	1			1	2		7
	delight	1				2	6	1	16
	joy	1				1	11	1	16
	pleasure			1		1	7	3	16
	beauty			1			3	1	17
D	chance			1			18	8	12
	coincidence		2		1		11		9
	accident		2		1		10		1
	luck		1				2		23
	speculation		2				11		2
E	amazement	1	1			4			3
	surprise		4		1	4		2	4
	horror	1	1		1	4	1	2	6
	terror	1					3		17
	exhaustion	1			1	2	1		8

起しているが出現回数は少ない。さらに *absolute*, *utter* は共起する名詞の数と頻度がともに少なく、*complete*, *total* と共起する名詞は皆無に近い。例外的に至福 (*bliss*) のみ *absolute* (4) (27%) が高い頻度で共起し、*complete* (1) と共起可能となっている。これは至福 (*bliss*) は喜悦の中でも最高極点を表す名詞であるため、極端に高い程度を表すこれらの強意形容詞と共起が可能であると解釈できる。

D群は偶発性を表す名詞であり、*pure*, *sheer* と高い頻度で共起しているが、*absolute*, *utter* とは全く共起していない。最も高い頻度で共起する強意形容詞については、*luck* のみ *sheer* で、その他全ての名詞は *pure* である。D群の名詞の中で *luck* (幸運) だけが喜ばしいという感情的要素を含んでおり、C群の結果から類推すると、

sheer は感情的要素を意味に含む名詞と共起することが多いのではないかと考えられる。

E群は驚きや恐怖などの感情や疲労感を表す名詞である。驚きを表す名詞では *utter*, *sheer*, *complete* の順で多く共起しているが、恐怖と疲労感を表す名詞では *sheer* が最も多く、全ての名詞で *perfect* とは共起していない。

以上の観察から、形容詞の本来持つ意味が転じて強意語として用いられているものの、共起する名詞の選択に大きく影響を及ぼしていることは明らかであろう。

3.4 共起する形容詞

この項では、強意形容詞の直後に形容詞が続きその次に名詞が続く用例の特徴を分析する。強意形容詞に続く形容詞をその特徴から3つに

表6 強意形容詞と共起する形容詞

	強意的形容詞		段階的形容詞		形容詞+名詞	
absolute (total:13)	6 46.2%	bloody total unmitigated	4 30.8%	desperate	3 23.1%	nonsense
complete (total:27)	18 66.7%	(&)utter absolute thorough	4 14.8%	new	3 11.1%	nonsense waste rubbish
perfect (total: 4)	0		0		4 100%	nuts pig
total (total:13)	6 46.2%	(&)complete &utter (&)full	3 23.1%	fatty new	4 30.8%	disaster disdain
utter (total:18)	6 33.3%	total complete bloody	0		12 66.7%	fool bastard bliss
pure (total:39)	5 12.8%	bloody fucking pure,(&) simple	13 33.3%	speculative severe	21 53.8%	enjoyment fear luck
real (total:20)	2 10.0%	&sheer &mere	14 70.0%	popular groovy cute	4 20.0%	genius hatred help
sheer (total:89)	10 11.2%	unadulterated (&)utter	12 13.5%	new innovative bad	67 75.3%	pleasure luck exhaustion

注:上段の数値は出現数,下段の数値は総出現数に対する割合を示す。

分類し、その出現頻度と共起語の例を挙げてまとめたのが表6である。

強意形容詞の後に続く形容詞を強意的形容詞、段階的形容詞、その他の形容詞+頻出共起名詞の3種類に分けることができた。

強意的な形容詞が2語続くタイプでは、*complete and utter* (16)が高い頻度で現れた。続いて*sheer, unadulterated* (4)や*pure*、(または*and) simple* (2)が目立った(ともに間にコンマ有り)。連続する強意的な形容詞の後に来る名詞は *nonsense, waste, bastard, rubbish, chaos* といった不快感、嫌悪感、軽蔑、混乱、絶望を表すものが延べ語数の半数を占めており、究極の否定的感情を吐き出す表現となっている。

段階的形容詞が続くタイプでは、強意形容詞は後続の形容詞が表す程度の度合いを強めるいわば副詞あるいは副修飾語と同じ働きをしており、共起する名詞 (*system, town, energy,*

etc.)には前項3.2, 3.3で指摘した様な名詞の意味的特徴は見られなかった。最も多い表現としては *a complete new +名詞* (4)が挙げられる。

その他の形容詞+名詞のタイプとは、強意形容詞と典型的な共起名詞の間に別の形容詞が置かれている用例である。名詞は不快感、嫌悪感、軽蔑を表すものが最も多く、次に感情や偶発性を表す名詞が多く現れていた(例:*perfect all nuts, complete gullible asshole; sheer female pleasure, utter physical pleasure; sheer good luck, sheer naked coincidence*)。間に来る形容詞に特別な特徴は見られなかった。

語彙別に見ると、*complete* (66.7%), *absolute, total* (46.2%)は強意形容詞連続型、*perfect* (100%), *sheer* (75.3%), *utter* (66.7%)は「その他の形容詞+頻出共起名詞」型、*real* (70%)は段階的形容詞型であることが判った。

4 おわりに

本研究では、記述文法的な先行研究で言及されてきたけれども実態が明確になっていなかった強調の働きをする形容詞に焦点を当て、「語の意味の相違はコロケーションの分布の差になって現れる」(赤野, 2003: 152) という考えに基づき、共起語を量的に分析して8つの語彙の特徴を探った。

本研究で得られた特に重要な結果は次の5点にまとめられる。①強調形容詞と共起する名詞は抽象名詞が大半でその意味の示す性質に程度や段階が見られるものが多い。②共起名詞は、不愉快や軽蔑といった感情とともに発せられる名詞、驚きや絶望あるいは喜びを意味する名詞、偶発性や不確実性を表す名詞が多い。③ *absolute* と *utter* では不愉快や軽蔑とともに発せられる名詞と高い頻度で共起し、*complete* と *total* は比較的広範囲に渡る意味の名詞、*pure* と *sheer* は偶発性を表す名詞、あるいは喜びを表す名詞と高い頻度で共起するという共通点が見られた。④ *real* は人間の特徴を表す色々な比喩的表現が共起名詞として現れていた。⑤強調形容詞と名詞の間に形容詞が介在する場合について、*absolute*, *complete*, *total* の後にはさらに強調の働きをする形容詞が続くことが多い。

最後に、本研究では極端に高い程度を表す形容詞の用例のうち強調用法とその他意味の用例とを基準を設けて二分したが、本来の意味と強調用法は極端な例を除いては本質的に段階的で二分化できるものではないため、このような用例の扱い方をさらに検討することを今後の課題としたい。

<注>

- 1) 例えばSinclair (1990: 69) では「意見や見解を述べる時」に使用する強い感情を示す働きがある形容詞を“Emphasizing Adjectives”と呼び *absolute*, *complete*, *entire*, *outright*, *perfect*, *positive*, *pure*, *real*, *total*, *true*, *utter* を該当する語として挙げている。Quirk, et al. (1985: 429-30) では強調の働きをする形容詞“Intensifying Adjectives”を広義で解釈しており3種類に分けている。“Emphasizers” (語を強める働きをするもの) として *certain*, *clear*, *definite*, *outright*, *plain*, *pure* (=sheer), *real* (=undoubted), *simple*, *sheer*, *sure*, *true* を、“Amplifiers” (程度を高めるもの) として *absolute*, *complete*, *entire*, *close*, *extreme*, *great*, *perfect*, *total*, *utter* を、“Downtoners” (程度を下げるもの) として *slight*, *feeble* を挙げている。
- 2) この様な語彙は「極端に高い程度を表す形容詞」で Quirk, et al. (1985: 429-30) では“Amplifiers”と見なされている。
- 3) 「極端に高い程度を表す形容詞」の用例について、(*absolute/complete/total/utter*) *silence*, *darkness*, *ban* は対象外とした。これらの例は *Longman Dictionary of Contemporary English* (2000) や *The New Oxford Dictionary of English* (1998) では強調用法ではない別の項目に挙げられており、*The silence/darkness is absolute.* と叙述用法でも書き換えられるためである。この様に判断に迷う用例は多いが、特にこの3つの名詞は幾つかの辞書に強調用法とは別の項目に明記されていて共起頻度が極めて高いので、除外するのが無難であろうと考えた。

参考文献

- 1) *Longman Dictionary of Contemporary English*. (2000) 3rd ed. Harlow: Pearson Education.
- 2) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. (2000) 6th ed. Oxford: Oxford University Press.
- 3) *The Concise Oxford Thesaurus*. (2002) 2nd ed. Oxford: Oxford University Press.
- 4) *The New Oxford Dictionary of English*. (1998) Oxford: Oxford University Press.
- 5) *The British National Corpus*. (2000) World Edition. CD-ROM. Oxford: BNC Consortium.
- 6) Aston, G. and L. Burnard (1998) *The BNC Handbook: Exploring the British National Corpus with SARA*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- 7) Leech, G., P. Rayson and A. Wilson (2001) *Word Frequencies in Written and Spoken English: Based on the British National Corpus*. Harlow: Pearson Education.
- 8) Levi, J. (1976) *The Syntax and Semantics of Nonpredicating Adjectives in English*. Bloomington: The Indiana University Linguistics Club.
- 9) Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow: Longman.
- 10) Sinclair, J. (ed.) (1990) *Collins COBUILD English Grammar*. Glasgow: Harper Collins Publishers.
- 11) 赤野一郎 (2003) 「コーパスと語彙」『英語コーパス研究』第10号.149-161.
- 12) 小西友七 (編) (1989) 『英語基本形容詞・副詞辞典』研究社出版.
- 13) 小西友七・南出康世 (編) (2001) 『ジーニアス英和大辞典』大修館書店.
- 14) 安井稔・秋山怜・中村捷 (1976) 『現代の英文法第7巻 形容詞』研究社出版.